文字もじ MOJI の世界

29. 中村征宏氏とナール，ゴナ

土井 遼太*

中村氏とナール，ゴナ

ナールとゴナ。中村征宏（ゆきひろ）さんによってデザインされた，写植時代を代表する書体である。

2019 年 9 月に開催された国際カンファレンス「ATypI 2019 Tokyo」で発表する機会をいただき，私はこの 2 つの書体について調べ始めた。海外からの参加者が多く来日するそのタイミングで，日本側から発信できることは何があるか考え，頭に浮かんだのが，「ナール」と「ゴナ」だったからである。

ナールは 1973 年に，ゴナは 1975 年に株式会社写研からリリースされた。ナールは今も一般道の道路標識で見ることができる（図 1）。ゴナは，雑誌や漫画，駅構内サインなど，様々な場面で使われている。（図 2）

ナールの誕生

1960 年代，日本の書体業界を牽引していた会社のひとつが，写研である。現在活躍している書体デザイナーの中には，写研で研鑽を積んだ方が少なくない。1970 年に，その写研がタイプフェイスコンテストを開催した。これは公募式のコンテストで，同社にとって初めての試みとなる，革新的な出来事であった。このコンテストで一等賞を獲得したのが，中村さんのデザインした丸ゴシック体，のちのナールである。

明朝体やオールド系のゴシック体，手書き文字が主流だった 60 年代。そこに突如現れたナールは，極細のウエイトに，大きな字面（じづら），そして幾何学的な骨格を持ち合わせた「新しい書体」であった。

日本語フォントの文字は，基本的に正方形の枠内に配置されており，縦にも横にも文章を組むこ

図 1　ナールが使用されている道路標識（2019 年撮影）

図 2　ゴナが使用されている東京駅構内のサイン（2019 年撮影）

とができる。そのため，例えば「う」のような細身の文字は，左右に大きくスペースができてしまうことになる。今のデジタル書体のように，クリックひとつで誰でも簡単に文字詰めができた時代ではなかったため，当時は，写植で打ち出された文字をハサミで切り貼りして文字詰めを行っていたそうだ。

中村さんもその苦労を経験していた一人であり，その経験から考え出されたのがナールである。極端に大きい字面とフトコロ（文字の内側の空白部分）を持たせることで，文字詰めをせずとも整然と並べられる組版を，ナールによって実現したのである。手で描かれたとは思えない，緊張感のある極細のウエイトもまた，見る者に新しさと衝撃を与えた。（図 3）

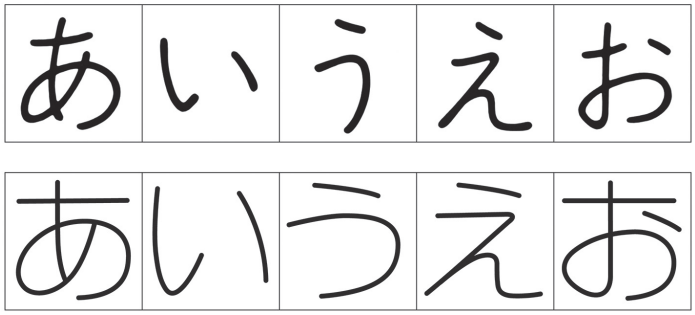


図 3　石井細丸ゴシック体（上段），ナール（下段）

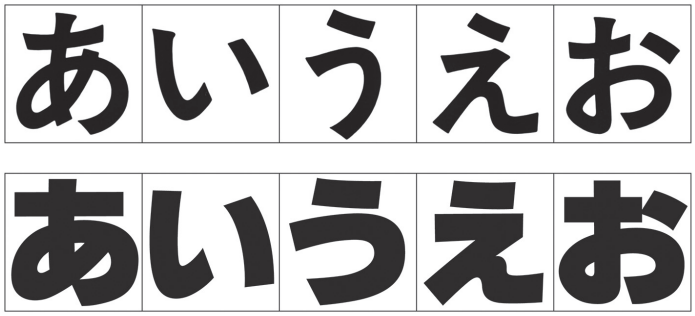


図 4　石井特太ゴシック体（上段），ゴナ U（下段）

ゴナの開発

1972 年に，写研は中村さんに角ゴシック体の制作を依頼した。それは，「当時の書体の中で最も太い角ゴシック体をデザインしてほしい」という内容であった。その依頼を受けて出来上がったのが，「ゴナ U」（ゴナ）である。

ゴナの特徴は大きく分けて 3 つある。まず 1 つ目はウエイトの太さである。写研の依頼通り，ゴナは当時のどの書体よりもはるかに太い仕上がりとなっていた。同じく写研から出ていた石井特太ゴシック体と比較しても，その太さの差は一目瞭然である。（図 4）

そして 2 つ目の特徴は，簡略化されたエレメントの処理だ。伝統的なゴシック体には文字の起筆部にアクセントを持つものが多い。一方ゴナは，水平垂直に切り落としたような，非常にシンプルな処理が施されている。

また，骨格も他書体とは大きく異なる。それまでのゴシック体は，楷書の骨格を踏襲していたが，ゴナはフトコロが大きく幾何学的な骨格となっている。

太さでいえばナールとは真逆であるにも関わらず，ゴナにも緊張感があるのは，精緻に揃った文字の黒みとフトコロのためであろう。

これら全ての要素が調和することで，ゴナの存在感は際立ち，商業的に成功した初めての幾何学的角ゴシック体となったのである。

モダンゴシック体の台頭

ナールとゴナが日本の書体業界に与えた影響は大きい。組版と書体デザインの常識は変わり，モダン系と呼ばれるゴシック体が隆盛するきっかけとなった。いわゆる「ゴシック体」といえば，大きく分けて「角ゴシック体」と「丸ゴシック体」という言葉しかなかったところに，ナールやゴナのような書体がリリースされたことをきっかけに，

新しい概念が生まれた。フトコロが大きく幾何学的な骨格の書体を，「モダン系」と呼ぶようになったのである。そして，60 年代以前の書体の多くを，「オールド系」と区別するようになった。

こうした点を鑑みれば，写研がコンテストを開き，中村氏が書体業界に参入したことが，日本の書体デザインの歴史上の転換期であったことに疑う余地はないだろう。

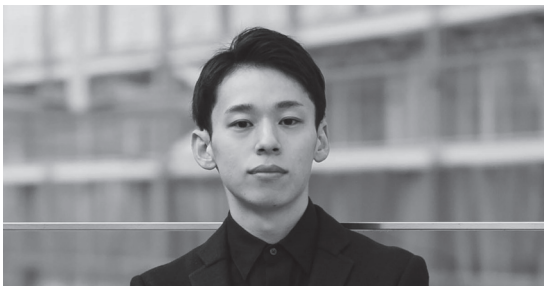
書体デザインとは

「文字とは，精神的なエネルギーのかたまり」。中村さんが仰ったこの言葉は，シンプルで強く，心に深く突き刺さった。

書体デザイナーはいつも，文字の美しさ，新しさ，可読性など，多面的な要素の調和をとることに苦心している。それはきっと，各国共通の悩みであり，文字づくりの醍醐味なのだと思う。

現在の文字づくりの方法は，全ての文字を手で描いていた時代とは大きく異なる。しかし，文字を作っていく上で，中村さんや先人の皆さんがそうしてきたように，エネルギーを注いで，大切にひとつの書体を作り上げていくことを忘れないようにしたい。

この研究を進めていく上で，中村さんには何度も快く取材に応じていただき，資料づくりにも多大なるご助力をいただいた。最後にこの場を借りて，改めて感謝を申し上げたい。■



＊ DOI, Ryota
Monotype 株式会社
タイプデザイナー
〒 102-0076 東京都千代田区五番町 1-9 MG 市ヶ谷ビル 5 階
ryota.doi@monotype.com

印刷の基礎知識からトラブル解決法まで、
現場ですぐに役立つポケットサイズの入門書！

印刷技術基本ポイント 文字・書体 編
「印刷雑誌」編集部[編]　四六判・並製／64ページ 1,000円＋税
文字と書体に焦点をあて、和文を中心に書籍や雑誌をはじめとした印刷媒体、さらにデジタル機器の表示まで、文字の基本を解説。

印刷技術基本ポイント 組版・ページネーション 編
「印刷雑誌」編集部[編]　四六判・並製／64ページ 1,200円＋税
和文を中心に、文字の並べ方や行を組むルール、ページのデザインなどについて、基本から応用までを解説。

印刷技術基本ポイント
印刷・デザインに関わる基礎的な事項を豊富なカラー図表により初学者向けに解説。各分野の基礎的な項目をすばやく理解できる。

印刷学会出版部　http://www.japanprinter.co.jp/